

# 平安私家集の「折り枝」用例集Ⅱ

岡 おか  
田 だ  
ひろみ

## はじめに

本稿は、「平安私家集の「折り枝」用例集Ⅰ」（『共立女子大学文学部紀要』第63集二〇一七年一月）に続くものである。前稿は、『私家集大成（中古Ⅰ）』を確認したが、今回は『私家集大成（中古Ⅱ）』を用いて、平安中期から末期に活躍した歌人たちのやりとりから折り枝表現（に類するもの）を収集した。収集基準は前稿と同じで、花や木や草等の植物の「折り枝」（もしくは葉、花びら、実）がやりとりされる場を対象とした。中古Ⅱは、1『和泉式部集』から105『中御門大納言殿集』までの一〇五種（異本含む）の家集がまとめられている。中古Ⅱの「折り枝」表現は、延べ数四一四例を数え、数でいえば中古Ⅰとほぼ変わらない（中古Ⅰは四〇〇程）。そのうちかなりの用例が平安中期の歌人たちによるものであり、中でも、一条天皇前後の齋院・後宮文学サロンが花開いた頃は突出している（和泉式部四五、赤染衛門三七、選子内親王二九、大中臣輔親二九）。平安末期（院政期）の家集は題詠歌が収載されることが多いせいであろうか、家集を読む限りでは「折り枝」のやりとりはかなり減っている。ただ、平安末期の歌人源頼政の家集には二〇ほどの例を見ることができることから、「折り枝」を用いてコミュニケーションをはかるといいう方法がなくなったというわけではないようだ。<sup>注</sup>

今後は、前稿とあわせて平安時代に盛んに行われた「折り枝」表現の諸相を、時代の流れ（流行）にも留意しながら明らかにしていきたい。

（注）とはいえ、中古Ⅰとあわせて考えると、やはりもっとも「折り枝」表現が用いられたのは平安中期ということはいえそうである。中世の艶書文例集には恋文と折り枝の合わせ方も記されており、知識として学び、手引きがあつて用いられる方法になつていったと思われる（参考 小川 剛生「中世艶書文例集の成立——堀川院艶書合——」（『国文学研究資料館紀要』二〇〇四年二月）

## 《凡例》

一、以下の用例は、『私家集大成』（中古Ⅱ）所収の歌集を用いて、「折り枝」が記されている詞書を中心に本文を引用している。ただし、読みやすさを優先したため、私に濁点を付した所がある。

一、基本的に「折り枝」の例は、同じ場を描いたものであっても、すべて掲出している。

一、基本的に歌集ごとに、①の通し番号をつけている。ただし、同一人物の私家集の場合は、「折り枝」を照応できるよう、同一歌の場合は番号を重複させ、異なる場合のみ通し番号とした。

一、和歌が「折り枝」の素材を示している場合もあるため（例、詞書では「花」としかないが、和歌から「女郎花」であることがわかる等）、和歌も引用している。ただし、同一歌集の異本間で同一の「折り枝」が用いられている場合、和歌は省略した。

一、補入印やミセケチで示されている部分は、これも読みやすさを優先したため本文に反映させた。ただし、文意が通らない場合はそのまま示している。

一、それぞれの家集の収載歌数を参考までに最初に記している（例 和泉式部Ⅰ 893）。

## 《用例》

### 1 和泉式部集（榊原家本）和泉式部Ⅰ 893

山里のぬしにしられておる人は花をも名をもしまざりけり（九九）

①とあるふみをつけたる花の、いとおもしろきを、まろがくちすさびにうちいひし

②一日御文つきたりし花をみて、まろなんさいひしと人のかたりければ、かくぞのたまひし  
しるらめやその山里の花の香は なべての袖にかへりやはする（一〇三）

③同じころ、人のもとより、桜の花をまたみすべき人もなければ、御れうにとてただ一枝をなんおりたるとて  
また見せん人もなければ山桜 今一枝をおらずなりぬる（一五六）

④人のもとに忘れ草忍ぶ草つつみてやるとて

物おもへばわれか人かのころにも　これとこれとぞしるくみえける（二〇八）

⑤ そちの宮、橘の枝を給はりたりし

かほるかをよそふるよりは郭公　きかばやをなじこゑやしたると（二二六）

⑥ 正月七日、親のかうじなりしほどに、若菜やるとて

こまごまにあふとはきけどなきなをば　いづらはけふも人のつみける（二五一）

⑦ まゆみの木のをいたるを見せ給て

ことのふかくもなりにけるかな

とのたまはすれば（三九八 a）

しら露のはかなくをくとみしほどに（三九八 b）

⑧ 橘につけて人に

たれにこはなをみせましわれをれば　山郭公さらにきなかす（四二二）

⑨ 祭の日、御前に人すくなにてさぶらふに、葵に御手習をせさせ給ひて

ゆふかけておもはざりせばあふひぐさ　しめのほかにぞひとをきかまし（四五五）

⑩ 五月五日、菖蒲の根を清少納言にやるとて

これぞこの人のひきけるあやめ草　むべこそねやのつまと成りけれ（五二九）

⑪ あふひをやるとて

みな人のかざしにすめるその草の　なはなにとかやいひてきかせよ（五五九）

⑫ 夕暮れにちぬさき瓜を斎院より給はせたるに、かきつけてまいらす

夕霧はたつをみましや瓜生山　こまほしかりしわたりならでは（五八〇）

⑬ 久しうをとせぬ人に、忘れ草忍ぶ草をつつみてやるとて

物おもはばわれか人かの心にも　これとこれとはしるく見えけり（六一六）

⑭人のもとにいくなりときくおとこの、きくの花につけてかはらぬよいひたるにかはらじといかがたのまむ今は猶　うすむらさきの色ときくきく（六四二）

⑮ゐかななる人に、ほととぎすに結びて、いとながき菖蒲の根をくはせて  
そこまではきこえしもせじ郭公　袂にかかる根をみてをしれ（六九一）

⑯正月一日はなを人のをこせたれば

春やくる花や咲くともしらざりき　谷の底なる埋もれ木なれば（七二六）

⑰同じところなる人の、ことかたにをきて、唐なでしこを大和ならぬなむあるとて、をこせたるに  
かひなきはおなじかきほにおふれども　よそふるからのなでしこの花（七三〇）

⑱同じ朝顔の花を、人のもとより

きりのまにみし朝がほの花をこそ　けふのあやめはいとどわかれぬ（七三五）

⑲心うしと思ふ人のもとに、梅ををこせたれば

むめつかば井関の水ももる中と　なりける私身<sup>ホケマ</sup>をまつぞうらむる（七三七）

⑳八月つごもり、人のもとに萩につけて

かぎりあらむ中ははかなく成ぬとも　露けき萩のうつをだにとへ（七五六）

㉑かみまつる日、人々きて、かしはのあるをとりて、歌かきてとせむれば  
神やまのまさきのかつらくる人ぞ　まつやひらてのかずはかくなる（七七二）

㉒三月つごもりがたに、散りはてがたなる枝につけて、人に

散りにしはみにもやくると桜花　風にもあてでをしみしものを（七八九）

2 和泉式部集続集（柚原家本） 和泉式部Ⅱ 647

㉓ひさしうをとせぬ人の、款冬につけて、ひごろのつみはゆるせとて、をこせたれば  
とへとしもおもはぬ八重の山吹を　ゆるすといはゞをりにこんとや（一一）

②4 南院の梅花を、ひとのもとより、これみてなぐさめよとあるに

よにふれど君にをくれてをる花は にほひてみえずすみ染にして（四八）

②5 二月許に、まへなるたちばなを人のこひたるに、たゞひとつやるとて  
とるもうしむかしの人のかににたる 花橘になるやとおもへば（一一〇）

②6 みあれの日、葵を人のをこせたるに

あふひぐさつみだにいれずゆふたすき かけはなれたるけふの袂は（一五九）

②7 月のあかき夜、梅の花を人にやるとて

いづれともわかれざりけり春の夜は 月こそ花の匂ひ成けれ（一七一）

②8 祭のかへさみるに、齋院の御車のうちに、しりたる人のもとに、葵にかきて  
昨日今日ゆきあふ人はおほかれど みまくほしきは君ひとり哉（一八〇）

②9 又尼の許に、たらといふ物、わらびなどやるとて

みせたらばあはれともいへ君がため はなをみすて、をふるわらびを（一八五）

③0 くれにかならずといひたるおとこ、あさがほにつけて

いまのまのつゆにかばかりあらそへば くれにはみえじ朝がほのはな（二六四）

③1 かたらふ人のもとより、なでしこをおこせてかゝる 本マ、二字旁全自 たるはなはあらじといひたるに

まことかとくらべてみれど我宿の はなの露にはなをうてぬめり（三三五）

③2 ほかなるはらからのもとに、いとにくさげなるうりの、人のかをのかたになりたるにかきつけて

もし我を恋しくならばこれをみよ つける心のくせもたがはず（三五四）

③3 あるやむごとなき人の、ゆゑありときこしめすむすめのもとに、梅花つかはすをみて  
花のかに心はしめりをりてみな 其ひとえだにみこそあらねど（三六三）

③4 瞿麦につけて、心かはりたりとみゆるおとこに

色みえてかひなき物は花ながら 心のうちのまつにぞ有ける (四〇九)

③⑤ わづらふときく人の許に、あふひにかきて

かめ山にありときくにはあらねども をいずしなずのもゝくすり也 (四二二)

③⑥ おさなきちこのあるをみて、わがこにせんと云人に、いとにくげなるうりのあるにかきて

たねからにかくなりにけるうりなれば そのあきゞりにたちもまじらじ (四二四)

③⑦ おなじころ、すゝきにつけて、さしもあるまじ 仮借ふみをおこせたるに

つゝむことなきにもあらず花すゝき まほにはいでゝいはずともあらん (四六九)

③⑧ 槿花やるなる人にやるとて

今のまの朝がほをみよかゝれども たゞこの花はよの中ぞかし (五三八)

③⑨ 春の初比、和布と云物を梅花につけて、人のおこせたるに

花みればこのめも春に成にけり みゝのまもなし鶯のこゑ (五四七)

④⑩ 九日、わたおほはせしきくををこせて、みるに、露しげゝれば

をりからはをとらぬ袖の露けさを きくのうへとや人のみるらん (五八一)

④⑪ 四日、まぢかきもみぢを、風の吹ちらすをとりあつむとて

こがらしの風のたよりにつけつゝも とふことの葉はありとやおもはん (六一一)

④⑫ 九日、もみぢのいとおほうちりたるを、はこのふたにいれて

人しれぬわが心ばにあらねども かきあつめても物をこそ思へ (六二八)

④⑬ 六日、人のもとより、呉竹につけたるをみて

からくして今日呉竹の夜もすがら ねて何事を思ひあかさむ (六三五)

3 和泉式部集 (未刊稀観本叢書) 和泉式部Ⅲ 150

④⑭ 八月ばかり、人のもとに、萩につけて

かぎりあらんなかははなくなりぬとも 露けき萩のうゑをだにとへ (六四)

- ⑤ 彈正將尊<sup>マサマ</sup>の御こかくれ侍てのちに、大千帥敦道のみこに花たち花をつかはして、いかゞ見るといひて侍しかば、つかはし侍し (二四四)

4 和泉式部集 (静嘉堂文庫藏) 和泉式部 IV 273

- ③ 源 道濟<sup>みなもとのみちなり</sup>、雲林院の花見にまかりて侍けるに、その桜を折りて (一一)

- ② 月あかき夜、花にそへて、人のもとによみてつかはしたりし (一八)

- ② 八月晦日に、はぎのえだにつけて、人のもとにつかはしける (四二)

- ② 久しうをとせぬ人の、山ぶきにさして、日ごろのつみはゆるせといひて侍しかば (二七九)

- ④ おなじ人の、ものよりきたりと聞て、同じ花につけてつかはしける

あぢきなく思ひこそやれつくぐと 独や井手の山ぶきの花 (一八〇)

- ⑤ 彈正 尹<sup>だじやうのいんたのめ</sup>為尊のみこかくれ侍て後、太宰帥敦道親王たち花をつかはして、いかゞみるといひて侍しかば、つかはしたりし (二一〇)

一〇

- ⑨ 上東門院にはじめてまいりて侍ける比、まつりの日、あふひにかゝせたまふてたびける御歌 (二二二)

5 御堂関白集 (神宮文庫藏) 道長 73

- ① つれづれと雨ふりてながめさせたまふほどに、中納言の宣旨の局より紅梅のいとおかしきをまいらせたまふとて

霞こめかばかりおしむ梅の花 いづれのひまにさそはれぬらん (九)

- ② 廿よ日のほどに、殿よりいとちあさきさうぶをたてまつらせたまへるを御覧じて、宮より

時鳥まつとききてやあやめぐさ まだうらわかき根をもみるかな (一五)

- ③ 五月三日ばかりに、いとおしきなでしこを、しのないしのまいらせたるに

露わけて <sup>(三字分発)</sup> さふけうなでしこを かきねかくれになににほひけん (三二)

- ④ ふの大納言の尼上の御かたに中将と申す人にあるやうある人なるべし、はちすのちいさきに



ひろさわの池のこゝろのいかなれば　うきたうてにたるうきはなるらん（六七）

⑤ くものおもと、いとちいさきうり　まいらすとて

山しろのうちにしなければたちいでても　みやこうりとてまいらするなり（六九）

⑥ 内侍のかんのとのに、朝がほのまだ露をきながらに　いととう

をきつらむつゆのけしきもゆかしさに　よそへしるらむけさの朝顔（七一）

6 大斎院前の御集（日本大学蔵）選子内親王Ⅰ 394

① 我はさわがしくて、人々のわすれぬ、正月一日まで　雪のきえのこりたるを、梅花につけていだす、さぶらひに  
ものことにあらたまるけさの白雪の　ふるき物とてのこれるを見よ（一一）

② 廿日、むめ、例の年よりもけのどかにをかしうさきて、かうらのもとにさしりたるを折らせて　さい将  
春霞花のあたりにたちさらで　かにやうつとをりてしも（一四）

③ かへし、梅の枝にかうじをならして、酒などいだすとて

この世には花のかざしもせぬものを　かむろのいひのいかでふるらむ（五七）

④ 月にこほりたる水をとりにてたれば、瑠璃の月のやうにすきたれば、かうじをいれてすのはにすゑて、同じこほりを、はしの  
たいにて、むめの花をはしてにて、　さいものかむのとのにたてまつるとて　さい将

春くれば花のひもだにとけぬるに　ひとつきながらむすぶこほりよ（五八）

⑤ 里より、さい将、はちすのみまいらせたるをふみのなにかきて  
にごりにしけがれぬたとひ思はずは　身のゆくすゑはあはれならまし（八八）

⑥ つごもりがたに、みぶ、さとより、さかりのやうにふちのいとをかしうさきたるに  
なつのよにさくとはきけどぶぢの花　いままでかかるをりはみざりつ（一〇三）

⑦ 同じころ、馬、たかうなまいらせたるに、くらきほどなれば、つかひかへしてのちにみれば、物かきつけたり、進、かくいひ  
やる

いとふらむころみえぬるわかたけの よふけにけるにいかと思ふらん（一〇六）

⑧ みあれの日、さい将の君、かもにまでたまへるに、きよげなる車のありけるに、あふひをやるとて  
しらねども紙のみあれにあふいくさ（二五〇a）

とあれば

いのるし（マ）のなかりけりやは（二五〇b）

⑨ 同じころ、馬、里より、栢の虫はみたるにかきて

ちはやくさいがきのほかは神な月 そでにしづえもひまのなきかな（一七九）

⑩ 七月ついたちに、さい将のさとなるに 進 一つのまにとかけて、穂にさしてあれば、さい将

秋きぬとほめかすめるを山たの いなばのつゆにそはつ袖哉（一九〇）

⑪ つごもりがたのつとめて、御前裁ごらずるに、萩薄つゆかかりわたるを、りて 進

秋ふかく物おもふ人の袖ならで かかる草葉の露もありけり（一九七）

⑫ 馬、あぜにて、またあかつきにおるれば、薄に結びつけて 進

花すすき朝ぼらけこそひしけれ うちそよめきてわかれつるけさ（二〇一）

ゆきずりにみつるやまがつのころもでを（二〇八a）

⑬ とて、わたるほどにさしとらせたれば、またあしたに、かざしの枝にさして

めづらしとこそおもひけらしな（二〇八b）

⑭ 二日、きのふよりもたかくふりたれば、南面にこれかれさぶらひて、梅の花にふりかかりたる枝をおらせて 宰相

ねたきかな花ふりかくすはるのゆき されどかにはたにるべくもあらず（二三二）

⑮ 十一月あやむべの日、こぞのひかげの赤くなりたるにさして、さゑもんのかみ

さしはへてみるけふよりもまばゆきは こぞのひかげのあかきなりけり（二四四）

⑯ あぜ殿に、にはかにまかでであるに、雨のいみじうふりてわりなきを、もふに、しすまひくさの蓬の中にありけるをとらせて、

さいさう

しらつゆのかかる野なかにすまひ草 あめにみだれてうなだれにけり (二六五)

①⑦ これをためまさききて、きを一そくばかりのほどにきりととのへて、一ににして、あふこづゑなどして、さかき さしてまい  
らせたれば、このさかきの葉にかきていだす

さかきをさしてこひにぞありける (三四四 a)

ためまさ、かみをゆふのかたになして

かみやまのかぜのたよりにつけつれば (三四四 b)

①⑧ 同じ月の十よ日に、ただみちが家に萩のおもしろきありとてめしたれば、まいらせたり、しん、かくいふ  
秋はぎのただかたはしのいろをみて つゆのをくこそおもひやらるれ (三九三)

①⑨ ただみちがいもうと、とりてまいらすとて ※萩

そのかみはさしかはりにししめのうちを あとにみるもあはれなるかな (三九四)

7 大斎院御集 (書陵部藏) 選子内親王 II 135

②⑩ かへし、しろかねのまつのえだにつけて、つかひにものなかづけたまふ

ねの日せぬまつをしも、たづぬれば 本 (一〇)

②⑪ 又はなみにいくときけど、このたびはまいる人もなければ、いみじうながきやなぎをもて、いとのもとにはといはせたれば  
ちりぬべきはなをのみこそみにきつれ 思ひもやらぬあをやぎのいと (一六)

②⑫ おなじころ、はこのふたにしちさきうりをならべてまいらすとて こだいふ

たちさはるしるしばかりぞあきぎりの うりふの山にもなれてける (四一)

②⑬ 賀茂にまてかる人々ゝいりきて、十月ばかり、御前なるもみちをみていみじうめで、いろしばしといはせたれば、さかきに  
かきて

しめのさかきはいろもかはらじ (四五 a)

二日ばかりありて、あおいさかきにやりなして、色／＼のかみにつゝみてまいらす

あかざりし袖のしづくはかずしけり (四五b)

②4 はつかあまりゆきいみじうふりたるに、さだよりの君、菊の枝にわたおほへるやうにゆきのかゝれるを、大ばん所にたてまつれば、みるにはなもいたううつろはで、しろきかちなれば、つくりたるはをつけてかきつく

みな、からうつろひはてぬしらぎくに ひとついろにもゆきかゝるかな (四七)

②5 むろまちとのより、なでしこをひめぎみの御もとにたてまつれたまふとて

つゆの身のおきふしみるにかひもなし きみこそおらめとこなつのはな (七三)

②6 かくて十二日、ねのひに、をいたる松のゆきかゝりたるにつけて、みつなりが

けふみれば子のひのまつもおいにけり 千とせのはるの雪つもりつゝ (一〇〇)

②7 おなじつき <sup>如本</sup> たまふみし さくらをこせて、はなのまざれにとてさしをかせたれば、こゝろばかりはとて、その日すぎて又の日

山かぜにみだれておしむをときかば たれかすぎましはなのわたりは (一〇六)

②8 五月五日、ゆふがた、のどやかにながめたるに、のりまさがむすめの少納言、やまざとにこもりて、ながきね、なかつかさ

やるとて

ほとゝぎすいつかとまちしかひもなく かきねをだにもとはずなりぬる (一一〇八)

②9 おまへに おみなへしうつさせたまて、それにつけて、みつきよの中将に

しめのうちにうつすこゝろあり女郎花 あかのあだばな露もをかるな (一一〇)

8 発心和歌集 (書陵部蔵) 選子内親王 55

9 道成集 (神宮文庫蔵) 道成 20

① 女の梅すこしとこひて侍しを、もをつかはすとして

みな人のならすかずをしかぞふれば あやしく梅ももゝといはるゝ (六)

10 輔親家集 (書陵部蔵) 輔親 I 210

①ある人にあふぎやるとて、ふぢの花にさして

ふぢなみのこゝろかけたるいろみなむ　そふるあふぎの風のしのびに（一一）

②八月ばかりに、人にふみやるとて、薄のほにつけて

しのすゝきしのびもあへぬこゝろにて　けふはほにいづる秋としらなむ（二五）

③御仏名の後朝、装束つかまつりなをすついでに、つくり花を、りてまがへるきくに人にいひける  
よもすがらおきあかしつるものきくおりつるつみやきえせざるらむ（四六）

④閑院女御さぶらひに、人々一す物いだすに、こうばいの枝に鳥つけていだすとてうたよむに  
くる人もなきやどにさくむめの花　とりのはかぜにをり見つるかな（五三）

⑤麗景殿女御かたの女房、ほそどのにいでいたるに、やまぶきのはなをとりつたふるに、歌あるべしとあれば  
おもふ事はでつもれるくちなしの　いふことならぬやまぶきのはな（五五）

⑥おなじ所に、ふぢの花をやまぶきにそえて、これはいかにとあれば

ふたこゝろありける人のおるはなは　ひとついろにもさかずありける（六一）

⑦人に物いふに、心いられしければ、ふようぞといへれば、松にふみをさしてやる

ひさしきをなにかはいはむいはしろの　まつのみずびはをひわかるとも（七三）

⑧左むまのせうかねすみ、つかさえてのち、露草うつしおこすとして

てにつみてみづからそめしはなゝれば　としはふれども色もかはらず（七四）

⑨冬のおはりにしりたりけるおむなの、ひさしうこぬおとこにやらむとて歌せむれば、をみなへしのをりからしてさゝす  
かれぬとやおもひなりなむおみなへし　をりく見えぬ人のとはぬを（七九）

⑩ある女のいへに、こうばいさきたるを、むめつぼの女御のだいばん所より、をもしろからんえだまいらせよとあれば、かはりて  
にはひかは君にますべきあらねども　おりてぞみするやどのむめがえ（八九）

⑪三月つごもりの日、いもうとのおとこのもとに、山ぶきの花をやるとて

あすよりは色やかはらんけふなれば のどけくちらでゐでの山ぶき (九三)

⑫ かもまつりの日、かたらひし人のもとより あふひ につけて

ちはやふる神かけつ、ぞうらめしき よそのかざしとなるあふひは (九四)

⑬ 四月ばかりに、むつまじき人のもとより、たちばなを、こすとて、むかしの人にならばまほしくなむなんあるといへれば  
たちばなのかほをとらめやいにしへを おもひわすれぬ袖のかさふり (一〇五)

⑭ おなじころ、おなじ人のもとより うの花を、りて

おもひいで、けさうのはなのつゆしけみ かきねにたもといとゞそぼちぬ (一〇六)

⑮ かたらかひし人の、七月五日ばかりに、まゆみのもみちたらむえだおりてとある、やりたれば

秋もまだあさきもみぢの色をわが こゝろふかくもたのみけるかな (一二〇)

⑯ けさうだつ人のもとにいきて、はなたち花の葉にかきてゐる

たちばなのかをむつまじみなれやらむ はなのすがたもおりてみるべく (一二二)

⑰ ある女のもとに、くさに文をかきて、かく

なつくさのむすばぬ人のこゝろもて 露にはいたくぬれぞしにける (一二三)

⑱ 左大臣殿さぶらひに、大ばん所より、からくだ物、のおほきなる枝につくられたるに、しゐくりなどをならして いだされたり  
しかば

なれるみはこゝのものゝいかなれば なをへだつらんからのくだもの (一九九)

⑲ おなじころ、大將殿、さぶらひに、ゆきのいたうふるあしたに、をしきに雪をすはまにおきて、まづむめの花とうゑてだいは

む所よりとてなざし、てあるに、かくかきつく

はま、つときはのいろにさきまじる 花のにほひはひさしかりけり (二〇四)

⑳ おなじころい殿の女御のさぶらひに、これかれものひとくさとりにやれとあるに、こうばいにきじをつけて いだせるを、  
人ぐゝかゝる花はありけりとあれば

くる人もなき山さとにさくむめは とりのはかぜにおりみするかな（二〇七）

①9 おなじころ、大将との、さぶらひに、ゆきのいたうふるあしたに、  
うゑて、大ばんところよりとてあるにかきつく（六）  
をしきにいれてすわまにつくりて、ゆきまづむめのはなを

②0 おなじころ、れいけい殿の女御これかれものひとくさとりやれとあるに、  
かゝる人の本にもかゝるはなはありけり、とあれば（九）  
こんばいのえだにきじをつけていだせるに、人ぐ、

②1 三月つごもり、れいけい殿のほそ殿に、あまたいであたるに、ものなどいふほど、かのしもといふ上ぎうし、  
りてもてきたるを、つたふとて  
山ぶきのはなを、

いはずしておもひためたるくちなしの いろことならぬ山ぶきの花（一六）

②2 おなじころ、くら人ところのひと、一すものいだしてまいれとあるに、  
そのかみに  
かんしからもの、つゝみたるに、  
やまぶきにさして、

ゐでとかのやどにしすめばやまぶきの はなのいろよりほかの物なし（一七）

①あるひとのがりあふぎやるとて、  
ふぢのはなにつけて

ふぢなみの心かけたるいろみなむ そふるあふぎのかぜのしのびに（二〇）

②3 四月ばかりに神そうめぐりして、  
うのはなを、りて人に見すとして

うのはなのうらめづらしく見つれども をりての、ちはつねのいろにて（二一）

②4 おなじよ、すそ川といふところにとまりて、御はらへしたまふほどに、  
とかいふといへるに  
みつのかしはといふかしはをおこせて、このはなに

わきたまるもすその川のきしにおふる 人をみつゝのかしはとをしれ（三七）

③ 御仏名のあしたに、御さうずくつかうまつりなをすついでに、  
けづりはなを、りて、まかづるまゝにさと人にやる  
よもすがらおきあかしつるしものきく をりつるつみやきえせざるらん（五二）

⑥おなじところの大ばむところよりとて、ふぢのはなを山ぶきにさして、これはいかにとあれば（六四）

②⑤「こんばい」のおもしろきこと、いひしに、いへにやりし、ほかよりとてはなさかぬやどならませばいにしへの 春をたづねて人はくまじや（六九）

⑦人にもものいふころ、しぐれしければ、ふようなめりといへば、まつにふみをさしてやる（七六）

⑧いもうとのをとこの、はなおらすといひたるに（七七）

⑨ふゆのおはりに、しりたるをんなひさしうこぬを、とこやあらんとてせむれば、をみなへしのをりからしにさして（八二）

②⑥あるをとこの本より、ふみやりけるかへり事にすゝきはにさして、草といへることいかゞといへばたれゆゑにもえん物かはさしも草 つゆに思ひのみにしあまれば（八三）

⑩あるをんなのいへにこむばいうゑたるを、むめつばの女御のだいばんところより、おもしろからんえだまいらせよとありけるにかはりて（九二）

⑪二月つごもりのひ、いもうとのをとこのもとに山ぶきをやる（九六）

⑭おなじころ、おなじ人の本に、うのはなをゝりてやるとて（一〇九）

②⑦かたらひし人、七月三日許、まゆみのもみぢたるえだをりてとある、やりたればよにもまだあさきもみぢのいろわかず（一二三）

②⑧とあれば、ふるきつたのもみぢにかきて、そのまゆみのえだにそへてかくいふ

こぞのあきふるきもみぢにくらべみよ いろには事におとらざりけり（一二四）

②⑩けさうだつ人のもとにゆきて、はなたちはなにかきてやる（一三四）

# 12大納言公任集（書陵部蔵） 公任 565

①おなじ所に紅梅うへたりつるに、はじめて花さきたるにおはしたりけるに、女御の御もとに

うへしよりしたまつ物を山里の 花みにさそふ人のなき哉（二）

②をみなへしほりていく所のありけるをとせたまうければ、あきのぶが家にとひければ、やり給ふける



おもふとも心もしらでおみなへし かななる宿にうつすなるらん（八八）

③しら川に、もみぢみに大との、をのこどもいきたるに、なかつといふ人のもとにやりける  
ぬししらで誰かおりけんやまざとの ものなる物とおもふ紅葉を（一二二）

④かれたる枝に雪のこほりつきて、はなのやうに見えければ、かくて所ぐやり給ける

雪ふれば花咲とのみみえしかど けさは枝さへさしてけるかな（一六四）  
春や咲ありしながらに鶯の さもあたらしくおもほゆるかな（三八〇）

⑤とて、うぐひすを桜の枝にすへておこせたらば、その枝を宮のすけのがりやり給たりければ  
⑥たけにこほりのつきたるを、女御殿にたてまつり給とて

君がため雪まを分て尋ねれば ひとよこもれる竹にぞ有ける（四二二）

⑦花山院おり給ふてのとし、仏名に、けづり花さして、みあれのぜじのもとへきこえたりける  
程もなくさめにし夢の中なれど そのよに、たる花のかげかな（四六八）

⑧たや寺のむすめどものもとに、しろきかみにせみをつゝみてはちすの花にさしてやり給ふたりければ、はちすの花をつくりて、  
此歌をかきてせみのなかにさしいれてたてまつりたりける

いづれをかのどけきかたにたのまゝし 蓮の露と空蟬のよと（五一六）  
⑨とてなむとあれば、きなるきくにさし給ひて

くちなしの色にならひて人ことを きく共何かみえんとぞ思（五四二）

13 赤染衛門集（榊原家本） 赤染衛門 I 614

①今よりはなどいひしかど、をともせで五月も過ぬ、六月ついたちころに橘につけて  
待くらし五月の程も過にけり 花たちばなはいかゝなりにし（一一）

②おなじ人のもとにあふひをやりたりしを、としへて、祭の日をこせて  
としことにむかしはとをくなりゆけど（三二a）

といひたりしに

あふひはけふのこ、ちこそすれ (三二b)

③ この人の法師になりてのころ、正月七日ひげこに わかな を入てやるとて  
春日野に今日のわかなをつむとても 猶御吉野の山ぞかなしき (五一)

④ 筥 をおさなき人におこせて

おやのためむかしの人はぬきけるを たけのこによりみるもめづらし (一一七)

⑤ 殿のうゑの春日にまいらせたまひしみちにて、伊与守兼資がむすめの 花 ををりて  
手もたゆく折てこきつる梅花 物みしれらばともにみむとて (一二四)

⑥ 御前の花 さかりなるころ、御物忌にてほかにわたらせ給へるころ、をりてまいらせし  
折こそあれ匂ふさかりにあくがれて 帰りて花の散をうらむる (一二八)

⑦ 一条殿桜御覧じにわたらせ給しに、なやむ事ありて御供にまいらざりしかば、かへらせ給て、  
ちりたる花 をつゝみてたまは  
せたりしに

さそはれぬ身にだになげく桜花 ちるをみつらん人はいかにぞ (一二九)

⑧ 帥殿にしたしき人のゆかりしは、ゑまいるまじとなんあると聞しかば、さとにあるは、うへの、御前のおほせ事にて、  
花 のさ  
かりなる を見せまほしくなんあるとおほせられたりしに、まいらせたる

もろともに見るよもありし花桜 人つてに聞春ぞかなしき (一三〇)

⑨ との、御前、ものがたりつくらせ給ひて、五月五日、あやめ草 をてまさぐりにして、けちかうみるをむなつしをとて  
我宿のつまとはみれどあやめ草 ねもみぬ程にけふはきにけり (一三六)

⑩ 久しうをとせぬ人に、うり にかきて

とへとおもふ人のをとせでうりう山 久しくなるはつらきわざかな (一六三)

⑪ まつりの日、あるきんだちの、あふひにたちばな をならしていひたりし

いにしへのはなたちばなをたづぬれば（一六八a）

とありしに

けふあふひにもなりにけるかな（一六八b）

⑫春になりてほかへわたりにしに、そのまへの梅のさきたりしをおりてやりしかばかりほどかはへましさく花の ちらんまでだにまてはまてかし（一二九）

⑬秋雨のいみじくふるひ、はぎの花につけて人にやりし

つまこひにしかはしからん秋はぎを 雨さへしほるをしき比哉（二四九）

⑭十月にもみぢのいとこき、うつろひたるきくをつ、みて、人

秋はて、いまはかぎりのもみぢとは うつろふ菊といづれまされり（二五二）

⑮おなじころ、はなをおこせていひたる

我宿の桜のさきてちるを見ば 物おもふ人もなぐさみなまし（二八〇）

⑯梅の花にかざして人のをこせたりしに、かのわろかりしかば

春ことにさくらたびとぞき、しかど むめをかざせるかぞつきにける（三〇八）

⑰秋のはじめに、とこなつにつけて、定基僧都母

とこなつのはなをのみ見てけふまでに 秋をもしらで過しける哉（三二三）

⑱さくらの花をおらせて、定基僧都の母

つれづれとものおもふ事も忘れけん いくよもあらじ花を見るまは（三三二）

⑲この人の車をかりてさが野にはなみにいでける人の、かへすとて色々のはなをさしてをこせたるを、いかゞいふべきといひしにかはりて

花のいろはゆき見すくも秋の、の おりくるまをぞまつべかりける（三四九）

⑳かねつねの中将、はなにつけて人に

いとまなみ山辺の桜見るほどに 春はあだなる名ぞ立ぬべき (三七七)

②① 正月七日、いなりのわたりにすむ人、すぎといふものまうしわたる、わかなををこせたりしに  
春日野のわかなとこそおもひしに いなりの山のすぎもつみけり (四七〇)

②② ねの日にゆきたる人の、小松にあをのりをむすびつけて、これをやうみまつといふ覧といひたりしに  
松山になみのかけたるものみれば あやうかりけるねのひなりけり (四七二)

②③ はちすのつばみたるをみにて、なすびのおそろしげにふしつきたるをかほにして、ほうしのかたをつくりて、人のをこせたり  
しに

ごくらくのはちすと身をばなすびまで うきは此よのかほにざりける (四七八)

②④ きたりにありしひじりの、たけのえだに、はちすのすくいたるををこせて釈迦仏の、給おりとて  
我宿のみぎはにおふるなよ竹の はちすとみゆる折も有けり (五一二)

②⑤ 久しうをとせぬ人に、をぎにつけてやりし

をとづれぬ人の心の秋や猶 いかなるをぎのはかはそよめて (五一六)

②⑥ 人のもとより、さくらの枝をいとおほきにおりてをこせたりしに

我ためにおれる心はうれしくて はなおしますとみゆる枝かな (五五五)

②⑦ 四条中納言の、こ、にはなのなきおり、おかしき花見えはをこせよ、となんありし、といふ人のありしかば、はなをつたえよ  
とてやりし

桜さへさかりになべてなりぬとも はななき宿はしらずや有らん (五五七)

②⑧ さてのち、人、はるつきたる花のおかしきにつけてきこえし

山がくれ人はたづねず桜花 はるさへ過ぬたれにみせまし (五五九)

②⑨ 人のもとよりはすのうきはに露ををきて、せみのしにたるを入ておこせて

何事のうきぞうき葉にうつせみの 泪はつゆとをきて消ける (五八二)

③⑩との、うへのやはたよりかへらせ給ふとて、かどの前すぎさせたまふに、風いたう吹しに、にはのをばないたくまねきしをおりて、をひてまいらせし

我宿のにはのをばなのおりかへり まねく時にも見でや過ぬる（五六七）

③⑪五月五日、内大臣殿のわか君の、しやうぶのいとながきをたまはせたりしに、たかちかにかはりてながきねもいつかは見ましあやめ草 君がひくこそうれしかりけれ（五九三）

③⑫おなじ日、しやぶにつけて、かねふさの君の

かきたえてとはぬに見えぬあやめ草 いかなる○とのうきにか有らん（五九四）

14 赤染衛門集（書陵部蔵） 赤染衛門Ⅱ 416

②①いなるのわたりにすむ人の、わかなを、こせたるに、すぎてふもの、まじりたりとき、しかば（九）

③③むめの枝の、とりのやうにこほりたるを、人のがりやるとて

鶯はあたのこほりとちられて まてどもまてどなかぬなりけり（一二）

⑧正月のつかさめしのころ、はつせにまうづるみちにて、ねのひなりしに、人々松をひきなどせしに、みの、を山のみえしに、うへのおほせことにて、花のさかりなるを見せまほしうなどおほせられたるをまいらせしに（一三）

⑦一条殿のさくら御らんじにうへわたらせ給ふに、なやむことありて御ともにまいらぬに、かへらせ給て、ちりたる花をかきあつめて、しもに給はせたりしにまいらせし（一四）

③④四条中納言の北のかた、こ、には花のなきなり、おかしき花見ばをこせよ、となむありしといふ人のありしかば、花をつたえよとてやりし

さく桜さかりになべてなりけり 花なきやどはしらずやあるらん（二一）

②⑧さてのちひと春いとおかしき花につけ、これより（二三）

②⑩かねつなの中將、人のもとにはなにつけて（二四）

②⑫たかちか、秋のふか女をむかへてすみしを、ものうらみしてほかにわたりにし、すみしかたのまへなる梅の花をおりてやりし

に(二七)

⑤ 二月、との、うへ、かすがにまうでさせ給ふ御ともにさぶらひしに、いよのかみかねすけ、梅花をおりて車にさし入とて(三三)

③⑤ むめの花につけて 定基僧都母

よそにてもみまゝ、ほしきを春かけて まちこし梅の匂ひかほれる(三四)

⑥ 御まへの花さかりになるころ、御ものいみにてほかにわたらせ給へりしにおりてまいらせし(四五)

②⑨ 人のもとより、はちすのうは葉に露をきて、せみのしにたるを入ておこせて(五九)

① たち花につけていひそめたりし人、をとづれで五月もすぎにしに、六月一日ころたち花にかきてやりし(六一)

⑦ 秋のはじめつかた、とこなつにつけて、たうきそうづのは、(六九)

③⑥ せんざい、うしにくはれたるを見て、いにし人、をのがいゑの花こそいとをかしけれといひたるに、色くの花をやるとて  
我がやどをあらみたれば秋の野の 花てふはなはよきにしもあらず(七三)

②⑤ ひさしくおとせぬに、おぎにつけてやりし(八〇)

⑬ 秋、あめのいみじくふりしころ、しまくるをみて、はぎをおりて人のがりやりし(八一)

③⑩ こみやれたより帰らせ給へとて、やどのまへをすぎさせ給おり、かぜのいたう吹に花をおりてまいらせし(八六)

⑭ 十月一日ころ、うつろひたる菊と、こきもみぢとをつゝみて、人のおこせて(九五)

⑮ おなじころ、花をおらせて人のかくいひたる(一八八)

②④ 祇陀林ありしひじりの、たけのえだにはちすつくりたるを、こせて の給ふなりとて(二四二)

⑱ さくらの花をおらせて 定基そうづの母(二九九)

③⑦ 時々くるをとこ、ちいさきうりをもてきたる、いかにいはんといひしに

つらげなるけしきをみるにうりふ山 ならしがほにもたちてたる哉(三四四)

②③ はちすのつばみたるを、みにて、なすびのふしつきおそろしげなるを、かほにて、法師のかたをつくりて、人のをこせたりし  
にやりし(三七八)

③⑧ いちごを、わりごにいでて、かくいひたりし

くれなるの袖にほふまでなけるたま たにのものとよそわかれつ、(三九八)

④ たかうなを、おさなき子にをこせたる人に(四〇五)

15 故侍中金吾家集(島原松平文庫蔵) 頼実 103

① やまぶきをおりて、ある人のうたよみてをこせたる、返し

ゐでにゆく人にもあらでわがやどに おりてぞ見つるやまぶきの花(三)

16 帥大納言母集(書陵部蔵) 経信母 15

17 四条中納言集(尊経閣叢刊) 定頼 I 189

① さくらを見ばやとのたまひけるをきゝて、  
いみじうめでたきはなをたてまつられたりける、あかぞめが家の花を、りにつかは  
したりける

さくらさくさかりになべてなりぬとも 花なきさとはしらずやある覧(二〇)

② うすざくらといふを、人のもてまうできたりければ

これやこのをとにきゝつるうすざくら くらまの山にさけるなるべし(四五)

③ 右大弁、花きこえたまふとて

春くてちりはてにける花のうへは このもとにこそとはまほしけれ(六〇)

④ 五条のあまうへの御もとに君だちわたり給て、  
菊のうつろひたる、  
もみちのたゞひとはつきたるをたてまつりたりければ

我のみやかゝるとおもへばふるさとに まがきの菊もうつろひにけり(七三)

⑤ こうりを人のたてまつりたりけるに

あさゆふにたつをやくにてうりふ山 ふもとのきりのはる、まぞなき(八四)

⑥ このうりを、人のもとにやりたりければ

うりつくり今はつらさもわすられて よそになれるぞこひしかりける(八五)

⑦ いたうわづらひ給けるころ、ところをたてまつり給へりければ、御返にかきつけたまひける人のいのちなかだに山にほるといはず しぬるところはあらじと思（一二六）

⑧ うへうせ給てのち、わかなを人のたてまつれたまへりけるを見たまひていにしへのかたみにつめるわかなゆへ 見るこのめにもみつなみだかな（一三二）

18 四条中納言定頼集（尊経閣蔵） 定頼Ⅱ 459

① 右衛門のあまの家の花おもしろしとき、て、人のもとにやりければ、かく侍（一）

⑨ しのびてもいふ人に、むめにかきて

せきあへてよにやもるらんむめつかば かく物おもふおりのなきかな（一一）

⑩ 藤原のすけつねをよぶに、ものへまかりぬといひしかば、たづねありきてえあはでかへるとて、うの花につけて  
郭公かたらふやどの卯花の みゆるかきねを尋つる哉（八九）

⑪ 三月十日のほどに、権大納言源宰相など雲林院におはしたりとき、て、をくれていきたるに、いととかへり給ふと人のいひしかば、おほきにさきたる枝をおりて、これをするしに御覽ぜよとて、宰相のもとにやりし

しばしだにまたぬをなにかうらむべき 花にとまらぬ人の心を（二五五）

⑫ 八月つごもり、うちのとのゐにさぶらふよ、おにのまにあれば、兵衛の内侍といふ人、ものいはんといふ、頭中将の物いはんといひつるをき、て、それと思ひつるとはみれとて、なに事にかとひたれば、あらざりけりとおもひて入にしかば、御前

の薄をおりて書つけてやる、その人のわらは名す、きといふ

さだめなくまなきつる哉花薄 ほにいで、むすぶ人もこそあれ（二九六）

⑬ いたくかれたる女郎花につけて

女郎花かれゆく野べのきりくす きく人もなきねをのみぞなく（三二一）

② うすざぐらといふを、人のもてまいりたりければ（三六七）

③ 弁のきみ花ましたまへる、たてまつり給ふとて（三八四）



⑤ こうりを人のたてまつりたるに（四〇五）

⑥ こうりを人のやりたりければ（四〇六）

⑭ ひさしくをとづれたまはざりけるに、おなじ人 しらぎくにさして  
つらからん方こそあらめ君ならで 誰にかみせんしら菊の花（四四〇）

⑮ 梅花につけて大式三位のもとへ

見ぬ人によそへて見つる梅花 ちりなん後のなぐさめぞなき（四五五）

19 佚名家集（陽明文庫藏） 12

20 能因集（榊原家本）能因Ⅰ 256

① はやう見し人の、令注といふものを一枝をこせたるに、かういひやる

いまよりはみ山かくれのはたつもり 我うちはらふとこのな、れや（七五）

② 中宮のすけためよしのあそむのもとより、はぎにつけて、かういひおこせたり  
人しれず秋をぞみつるわがやどの 小萩がもとの下葉ばかりに（一三二）

21 能因法師歌集（書陵部藏）能因Ⅱ 157

① ある人、はたつもりといふ物をおこせたるに、かくいひやりける（一四一）

22 主殿集（書陵部藏）四条宮主殿 130

① 返しに、まつを、こせて、これにあへといへりければ、またいへる

おきあたることさへよはきつゆのみは 時をまつにぞおもひなさる、（三二）

② ある人の、ひさしうながゐすとして、いたくふすへて、をみなへしにつけてのたまへりし  
なにかいはんいはでこそみおもふより まがきのはな如本のまねめるかな（三四）

③ 人になたところ、をなじひとの御もとより、うつろひたるきくのはに、まことかとかきてありければ  
まことにはつゆのあだなはさだめなし いかによそふるきくのはなぞも（三六）

④ あきころとをくいくおとこ、はぎにつけていひをくれる

うしろめたつくを、<sup>\*</sup>るこそ秋はぎに おもはぬかたの風もこそふけ (五二)

⑤ 秋ころ物いひそめて、とをくいにけるおとこの、九月ばかりにきくの花をふみの中にいれていひはべりける  
ちよもとてむすびし事のはにさへや はなうつろはす露はをくらん (六十)

⑥ あるおとこたちばなをおこせて、いかゞいへりけん

たちばなのかばかりいまはなれる身に なに、にむかしとおもひいづらむ (九六)

⑦ としかへりて、三月二日、をやのかくれたまへりける又の日、も、のはなたてまつるとて  
も、のはなすぎたるさまのかなしきに おくれぬみとぞなるべかりける (一一八)

23 家経朝臣集(書陵部藏) 家経 108

① はやうしりたりし女のもとより、のりをつゝみて、もにすむゝしのとかきたる

いかにしてかきたえにけむもしほくさ ことはりなりや人のうらむる (二〇)

② とこなつの花を、女の許につかはせたるに、かくいへり

とこなつにほへるはなのいろよりも おれるこゝろのほどをこそみれ (六六)

③ 二月つごもりに、左京大夫道雅さくらの花のえだをおりて、ことしうへたるとあるに  
うへしときはなさにけりわれのみぞ はるにしられぬためしなりける (八三)

24 伊勢大輔集(彰考館文庫藏「諸家集五」) 伊勢大輔 I 150

① かれにける女のもとに、をとこ、こうばいをゝりてをこせたるに

くれなるのいろに、ほへる梅の花 人あく人のいかでをりけん (三)

② 雲林院のさくらを、みやこのにくらべよとて人のをこせたりしに

白雲のかゝるやまべのさくら花 これはこれぞと君ぞをりける (四)

③ むらさきしきぶ、きよみづにこもりたりしにまいりあひて、院の御れうにもろともに御あかしたてまつりしを見て、しきみの

はにかきてをこせたりし

心ざし君にかゝくるともし火の おなじひかりにあふがうれしき(一七)

④松、ゆきのこほりたりしにつけて、おなじ人

をく山のまつばにこほるゆきよりも 我みよにふる程ぞはかなき(一九)

⑤院の白川殿におはしますころ、右大殿もおほすことありげなるに、おほとのに候たまふつとめて、  
このはにかきてたまはせ  
たりし

よのなかにふきよる方もなきものは このはちりぬるがらしのかぜ(六二)

⑥同じ宮に御<sup>ママ</sup>むすめの、御まへにありつるとてちいさきうりをこせたりしに

はかくれずたちもいではやこまのうりの そのつらにこそならまほしけれ(七八)

⑦皇太后宮から、むかしのやへざくらをたまはせて、女房

これやこのならのみやこの八重桜 にほひはかずもしられざりけり(九〇)

⑧同七日、わかなを人のをこせて、これはおひたる人のためにつみたるといへりしに

我ためにゆきまのわかなつみければ としかへりてぞうれしかりける(一一六)

⑨かたらはむと云人のひさしくをとせぬを、つゝじにつけていひやりし

いふやとていふほどをまついはつゝじ いはずとてやはいはでやむべき(一二二)

⑩なすびといふものをさるにつくりて、かれたるきのえだにつけて、人

おもはざることのさまかなとなすび からきのえだにならむものとは(一四二)

25 伊勢大輔集(書陵部藏) 伊勢大輔 II 174

⑧ゆきのふるひ、人のもとより、これえさせたる人のためにつみたる、とて、  
わかなをこせたりしに(二)

⑪さぬきのかみかねまさ、ことにつけて心ざしありとき、しかば、  
やなぎにつけてやりし

かたよるときくぞうれしきあをやぎの いとゝたえせずききはてなん(二三)

⑦皇后宮より、ならの八重さくらをたまはせて、かく（一七）

⑫人のもとより、まきの葉につけてをこせたりし

たつた姫ちぐさの色はそむれども まきのうはは、紅葉けもなし（四五）

⑬さがみが久しくおとせざりしかば、木のはにかきて

木のはたに風のたよりのとひくるに 人こそ人を忘れはつめれ（四九）

⑥皇后宮にさぶらふむすめの、をまへよりとて、こうりをおこせたりしかば、まいらせし（九一）

⑭おとこのありける人を、心かけたりけるが、その人なんまつとき、て、みちにゆきあひて、木のはにかきてとらせける  
たにがくれ木のはが下にゆく水は 人こそしらねすまぬ物かは（一三九）

⑮久しくをとせぬ人に、しのぶ草にさして

あれにたるやどの、きばのしのお草 かくしけれとは契らざりしを（一七二）

26伊勢大輔集（書陵部蔵）伊勢大輔Ⅲ 127

⑧正月七日雪のふるひ、若葉を人のをこすとて、これはおひたる人のために、つみたるとてをこせたりし（二）

③とう式部きよみづにまいりあひて、御前のおほむれうに、みあかしたてまつりつるをき、て、しきみの葉にか、す（一二）

④同じひと、まつの雪につけて（一四）

⑥皇后宮にさぶらふむすめの、こうりを、まへよりとておこせたりしにまいらせし（六二）

⑯きくの花とむめの花とをおりまぜて、人をこせたりしかば、かくいひて

きくは秋むめは春とぞおもひしを おなじをりにもにほふ花かな（一一五）

27入道右大臣集（尊経閣叢刊）頼宗 110

①大宮にとのひとりたてまつりたまひて、これもていねとおほせられしかば、もてにげたりとてかんだうありて、またのひ、む  
めのは たてまつりたまひて

きみにこそみすべかりけれむめのはな ひとりをしみてくゆるけふかな（一七）

②道命あざり、はじかみのはなをおこすとて

はなのみなちりての、ち<sup>は</sup>はからくして　のこれるものは、じかみのはな（六三）

28 範永朝臣集（書陵部藏） 範永 188

①山とのかみのりたゞ、なくなりてのとし、いへのさくらのさきたりけるに、かの家につかはしける  
うへおきしひとのかたみと見ぬだにも　やどのさくらをたれかおしまぬ（七）

②つれなかりける女のもとに、をみなへしにつけて

一夜だにねてこそゆかめをみなへし　つゆけきのべにそではぬるとも（五三）

③つれなき人に、薄につけて

むすばれんものとおもへばはなす、き　かぜになびかぬのべしなれば（六八）

29 相模集（浅野家本） 相模Ⅰ 597

①さかりすぎてくちたるなしを、おさなき人のもとにやるとてたゞならじとて

をさかへしつゆばかりなるなしなれど　ちよありのひとはいふなり（一〇二）

②まつりのかへさみて又の日、六はら蜜説経き、にまでたるに、昨日むらさきのにみえしくるまのかたはらにありしかば、ことは  
て、いつとてあふひをやるとて

きのふまでかみに心をかけしかど　けふこそそのりにあふひなりけれ（一一四）

③しはすのついたちころに、いみじういろこきもみちをふみの中にいれていひたりし  
ふくかぜものどけきやどのしるしにや　もみちながらもときはなるらむ（一八三）

30 相模集（書陵部藏） 相模Ⅱ 30

31 思女集（書陵部藏） 相模Ⅲ 28

32 相模集（針切） 相模Ⅳ 36

33 出羽弁集（書陵部） 出羽弁 95

①物がたりなどのついでに、かくまいらぬほど、なかはかなきことにつけても、うちおどろかさせたまふまじき、いみじうあなづりたりなどある人に、いまかならずきこえめ、かうき、つればうるさきまでなどいひたるに、日ごろもひさしう宮にもまいらずなどあるに、をかしからんこともがな、いひやらん、ことなることなきはよしなしなど思ふほどに、このころのさくら、よのつねの春よりもいみじきを、ひとえだおらせてあれより、みぶのたいふさだ中なり

をちこちの花のほひしつねならば たれかはくる、春を、しまむ (二九)

②あふみのかみやすのり、みぬでらにつくる山ざとにさくらのさかりにきて見よとありしを、いとよきことなどいひしかど、さかりになるまで思ひもた、でやみぬるに、そのころあしこにありて、みもおどろけとにや、えならずいみじきをひとえだをりて、たゞ物もいはおこせたるに

ひとえだをみるにもいと山さくら いま、でゆかぬみもなげつべし (三五)

③はぎのいみじういろこくさきたるを、ちりなばをしとて、こいよのきたのかたのおらせたまへるかへりごとに  
いろにこそ猶めでらるれいくちたび うき世中にあきはぎの花 (九二)

34 四条宮下野集 (書陵部蔵) 四条宮下野 211

①せうなごきよふさ、しぜうなごのもとに、おぎのはにつけて、いかにぞやいひたりし、これいかにいはむとありしかば  
かはかぜにそよとばかりはこたふとも おぎのうはゝわつゆもなびかし (一〇)

②九月九日、きくを、これはいかにするもぞとてをこせたれば、わがやうにおほゆる人なれば  
としつみておりぞしりぬることさらに わかゆるきくのつゆのか、れば (八五)

③あきいへの少将のありしかど、わすれて、大納言殿、おまへのたからせてみせさせたまふに、ほにいでたるをおりてたまはせ  
たるに、かきつく

かりそめにみてのみなどか、へるらむ 山だのいねはとしをこそつめ (九一)

④ゆきのいみじくたかくふりたるひ、うへ、なん殿のゆき御らむじにいでさせおはしまして、……あのすゝきのゆきおとさでお  
りてとめせば、それにとらせよとさしておほせらるれば、とぐちのみすのしたよりさしいるれば、とるまゝに

ゆきふればさかぬえだなくみゆれども　おりからまさるはなすゝきかな（九七）

⑤ はぎのいみじうひろごりてさきてたるを、うへより、しきぶの命婦、御つかひにて、はぎのかさたてまつるとてたてまつらせ  
おはしましたるを、しなの

はぎのかさをばしかやきるらん（二〇五　a）

御つかひのしきぶ

つゆしげきあきの、はらのあさゆふに（二〇五　b）

⑥ 大納言殿、宮の御せんのせんざいたけたかしとて、わらひまうせたまひて、しられまいらせで、おかしげならむうへかへむとの  
たまはせするを、心ならず、みつけまいらせんとあらがひまうす、さらにしられじとあらがはせたまふ、……十日ばかりきけば、  
いかゝすべからむとおもへど、さてのみあらんやはとて、しかのかたをいとおかしげにつくりて、あをきうすやうをはぎのは  
にやりて、しかにをしつけて、かきつけて、よ中ばかりに、とう三条殿にまいりぬ

つゆをきてたれかは見けるさをしかの　しがらみふする野べの秋はぎ（二一〇）

⑦ 返るとき、てひとくくるに、なにはにもこむといひしに、人ぐのこしにもなかりしもとなり、をともせで、ほどへて、かへ  
らせたまひて、やどゝひたりしほどに、いとうすきまゆみのもみぢの、えだのみえしはにかきつけてやりし

おもはずにもみぢのいろのうすければ　かへるもしらぬそりまゆみかな（二三二）

⑧ はつゆきのつとめて、かへでのもみぢのいろくなるに、ゆきのかゝりたるをおとさで、ためなかゝをこせたる  
うすくこくしぐれのそめしもみち葉に　いまひといろをそふるしらゆき（二三三）

⑨ 七月一日、いとこきもみぢにつけて、くら人の弁もろかた

今日くればあきのしるしにたつたひめ　もみぢのにしきおりそめてけり（二六六）

⑩ かれたるあふひをつゝみて、つねかた、こしきぶに

かれにけるあふひなれども人しれぬ　心にはなをかけぬまぞなき（二七四）

①十一月ばかりに、いとこき紅葉の、あきのさかりのやまでらてはべりしにつけて、人にいひやりはべりしとふひともなき我やどののみぢ葉、風だにしらぬものにぞありける（四八）

②おなじ人のいゑなる紅梅を、七条なる所にうへさすとて、こひにやりて侍しに、おこすとてむめがえはねこしてしきみさそはれぬ 是るきてとはゝ如何かこたへん（一一八）

③いとちぬさくつくりたるまつにさして

うれしくもふかみどりなるいろにいで、ちぎりそめつるむすびまつかな（一五五）

④はぎのはなのいとをもしろきにつけて、しのぶる人のもとより

あきはぎのさかりになればみな人に しかありきとやいひさかすらむ（一八五）

⑤東宮の御かたの女房のつばねのまへわたれば、すゝきのほをむすびて、さしいでたりしかば、しりたる人なるべしほにいで、たれかむすばんはなすゝきはぎのしたはのいろかえばこそ（二〇五）

⑥ふみやる返事はせで、山ぶきの花をつゝみておこせたりしおほむなに

くちなしの色をみするやいかならむ 人にとへとやゝまぶきの花（二〇七）

⑦さぬきのかみ、秋ころまできて、いとたかきをぎのはべりしをみて、おのがもととなるは、こよなくおとりたりけりとあらがひて、

またのひ、をぎにさして いへつねの朝臣

おひおとることこそあらめおぎのはのかぜのおとさへこよなかりける（二一七）

⑧九月ばかり、さくらのいみじうさきたるに、ふみをつけて するがのかみさねのりなにせんにちりもやするとなげきけむ ふけどもかぜにはなはさきけり（二一九）

36 成尋阿闍梨母集（書陵部藏）成尋母 175

①これも返事にはかゝず、むかしありけるとうろくといひけるこそ、かやうなることはいひけれとおぼえしかば、とゞめてき、さるはことゝのおぼえぬまゝに、おさなきものゝ、ぎうしの中にあふひをいれたりけるに、かれたるをとりいで、これ御覽ぜよといふに、おぼえはべりける



いのりつ、神にかけてしかひもなく あふひしられぬこひをこそすれ（一一二）

②五月五日とて、おさなきちごどものさうぶとりちらして、これにものかけといへば  
いつかともしらぬこひちのあやめぐさ うきねあらはずけふにこそありけれ（一一八）

37 弁乳母集（書陵部蔵）弁乳母 106

①宮、春宮にいらせ給へるに、殿上人こゆみいで、宮の御かたにかけ物申て、ひわりこのうへにまどかきたるふたに、はなをち  
らしてかきつけてだいた所にはいれたる

かちまけのゆみのやませにちるはなを まといのほかの人もみよかし（一二二）

②とあれば、かねのまとをさかりなるえだにつけて

あづさゆみをなじまとゐのうちなれば ちらぬ桜の花をこそみめ（一二三）

③殿上人おほくうちの御ものいみにこもりて、わが宮の御かたにくだもの、をろし申たれば、いだすふたに、ひとつにはこうば  
い、ひとつにはしろきむめをおほして、色をもかをもとてむすびつけたれば つねのぶの君

しる人のしるなる花のいろなれば 君みるらんとをもほえぬかな（一二三）

④四条宮に家のこうばいをたてまつりたるに、ほかにわたらせ給へる、みるに、めでたくさきたれば  
かばかりのにほひなりとも梅の花 しづのかきねを思ひわするな（三六）

⑤東宮の、御さうぶのねめしたる、まいらすとて

たにふかきいはねのあやめ君がため ながきためしをひきてつるかな（七四）

⑥きくにつけて、御かへし

秋もあまたすぎける君ときくものを ひさしきくれは今日のみやしる（八二）

38 藤三位集（書陵部蔵）大式三位 I 63

①しろき菊にさして、おなじ人に

つらからんかたこそあらめきみならで たれにか見せむしらきくの花（一〇）

②おなじ人に、梅にさして

見ぬ人によそへてぞみるむめの花 ちりなむのちのなぐさめぞなき (一八)

39 大式三位集(端白切) 大式三位Ⅱ 34

③賀陽院のむめを、りて、かのわたりよりたまはせたりしかば

いとゞしくはるのこゝろのそらなるに またはなのかをみにぞしめつる (二)

②むめのはなにさして、四条の中納言(一〇)

④こ院のわか宮とまうしゝころ、うつゑのまつをひとのこにつかはし、

あひおひのをしをの山のコまつばら いまよりちよのかげをまたなん (一七)

40 橘為仲朝臣集(書陵部蔵) 為仲Ⅰ 104

①むめの花のおなじ□<sup>え</sup>だに、しろきこうばいさきまじりたるを、皇后宮にたてまつりたりしを、これはいかゞみる、と女ばうの

みせたかひしに

いづれとかわきてをりつるおなじえに ひといろならぬむめのにほひを (三二)

②宮にさぶらふほど、うち殿よりもみぢをたてまつらせたまひたりけるを、ゝりてさぶらひにいだされて、これはいかゞ見ると

ありしかば、まうしいれし

たづねてもふきくるかぜのなかりせば いかでか見ましよそのもみぢば (五一)

③うぐひすのすにあるをこめながら、きのえだなるを、りて、人の宮にまいらせたるを、いかゞみると女ばうの見せたまひしか

ば

も、しきにそだつとならばうぐひすも くもゐのつるをみもならはなむ (六八)

41 橘為仲集(尊経閣文庫蔵) 為仲Ⅱ 70

42 大納言経信卿集(三手文庫蔵) 経信Ⅰ 132

43 経信卿家集(書陵部蔵) 経信Ⅱ 231

あおのむまをまつひくものと思まに わすれやすらむけふのねのひを（五）

①とて、こまつにつけたりしかへし

②関白殿の内大臣殿とましゝをり、四月まつりのひ、あふひにぐして

かみ人のしめのうちよりひきつれて わがやどにこそあふひかけ、れ（四二）

③四月ばかりに、たちばなにつけて、むかしをわすれぬよしなどありける、かへりごとに  
いとゞしくわすられぬかなにほひくる はなたちばなのかぜのたよりに（六三）

44大納言経信集（書陵部蔵）経信Ⅲ 277

①正月七日子日なるに、松につけて出羽がもとより

あをのむまをまつひくものとおもふまに わすれやすらむけふのねのひは（三）

②右大弁の姫君のをさなきが、歌をこのみて、雪のふるひ、梅花ををりて、をほち殿にとて、かくありし  
むめのはなゆきにはやされめでたきは いとゞこまつすゑぞゆかしき（一三）

③なでしこのたねをたづねたるを、をこすとして

とこなつのはなもつゐにはちりければ かたみにこれぞとりてをきたる（五五）

④若君の、播磨守俊綱のもとにわたりて、五月五日くすだまやりたまふとて、菖蒲にかきつけられし

かくれぬをわすれざらんあやめぐさはなのたもとにけふかゝるとも（五九）

⑤人の許に、また人のたちばなにつけて、むかしをわすれぬよしなどありける、かへり事をせさせきこえける  
いとゞしくわすられぬかなにほひくる はなたちばなのかぜのたよりに（八三）

45師実集（伝俊頼切）師実 16

46津守国基集（書陵部蔵）国基 154

①四月一日、ある女のおゑをすぐとて、なにことかといひいれさせて侍しに、かへることをばいはず、やまぶきの花を、こせたりしかば

くちなしのいろにさけばかやまぶきの すぎ行はるをとまれともいはぬ (八二)

47 賀茂成助集 (徳川美術館蔵) 成助 3

48 顕綱朝臣集 (書陵部蔵) 顕綱 105

① 斎院の辺にさぶらひける人のよのなかにかくてあるやうありて、おもひかけぬところにありければ、としごろになりて、四月の  
かものまつりの日、あふひにかきてつかはしける

おもひきやそのかみやまのあふひぐさ かけてもよそにならんものとは (四)

② 二月ばかりに、寺はらにかうき、にまかりたりけるに、ある宮ばらの女房、また車をならべてき、ければ、たれともなくて、し

きみの花にかきてつかはしける ※「は(葉)」か

よそく(く)にみつのくるまとおもへども 人のこゝろはひとつならなむ (一一)

③ しりたる人のもとより、ひさしくおとづれずとて、のきにおふる草をおこせたらば、わすれぐさと思たるにやとて

これやこのおとにき、つるわすれぐさ またこそしらね心ならひに (二二)

④ しりたる人のとをき国へまかるとて、あこたうりをおこせたりければ、うりにかきてかへしやる

みるからにつらさぞまさるあこたうり たちわかれゆくみちとおもへば (三四)

49 康資王母家集 (龍谷大学蔵) 康資王母 154

① 殿上よりくだもの申たりしに、花橘を、りておくられし、ふたかへし参らすとて 師賢

時鳥こよひいづこにやどるらん はなたち花を人にをられて (三五)

② おなじ六日、わかな人につかはすとて

身をしればあしたの<sup>あすのあした(米)</sup>はらもたのまれず けふはまがきのわかなをぞつむ (四五)

50 公実集 (陽明文庫蔵) 公実 2

51 江帥集 (書陵部蔵) 匡房 I 523

① をんなにかはりて、なでしこにつけて

みをなげてなみだやつゆにまがふらん あれのみまさるなでしこのはな（四一四）

② わかき人の、あさがほをおりて、御らむぜよといひたりしかば  
たとふべきかたこそなけれわぎもこが ねくたれがみのあさがほのはな（四六八）

52 匡房集（有吉 保蔵） 匡房Ⅱ 131

53 周防内侍集（桃園文庫旧蔵） 周防内侍 96

① しぐる、ゆふぐれに、院の中將のぶむね、をぐら山のもみぢみになんいきたりつるとて  
ふかきもみぢのえだを、みよとておこ  
せたれば

わがためはあらしの山のもみぢばの ふかきいろにはいかでみすらん（二一）

② 三月ばかり、もろかたの弁、まとのまえよりすぎけるまゝに、  
やまぶきをひとえだ おこせたれば、とほくならぬさきにと  
て、はにかきつけてとらせし

うれしくもやへ山吹をみするかな とへともきみをおもひかけぬに（三一）

③ まつのをにまいりて、かへりて、うちにあふひまいらすとて  
なべてにはかけてもいはじ君がため ちよまつのをあふひぐさにて（三八）

④ 院のつほねに、つねにあひずみなる人のいでたるほどにまいりてみれば、もやのみすに  
あふひのかれてかゝりたるにかきつけ  
し

かくれともかひなきものはもろともに みすのあふひのかれはなりけり（三九）

54 一宮紀伊集（天理図書館蔵） 祐子内王家紀伊 78

55 肥後集（書陵部蔵） 肥後 207

① 正月一日、せりを人のむすびてお、<sup>ママ</sup>せたる、は、きぎのめのと  
こほりせしたわだのねぜりあらはれて かゝみにつめるとしのしるしに（一二）  
② かへし、むめのはなをむすびて

むめがえにこづたふとりにさそはれて さはのねぜりはつみもやられず (一三)

③ あめのふるに、やなぎの枝を人のがりやるとて

枝にまたこまれるまゆにゆきふれば みづひきにするあをやぎのいと (三二)

④ はなみてかへりて、一枝人のがりやりたれば、これはいかにといひたるに  
山さくら一えだやるはみるゆきと さそふしるしの心づからぞ (三七)

⑤ 人のもとに、ちいさきさくらのはじめてさきたるが、心とけてもさかざりしを、かへしやるとて  
いかゞとぞかぜにつけてもおもひやる はなさきそむるやどのさくらを (四三)

⑥ はるのよ、花を人にやるとて

はなによりうちもふさねばはるのよは しくさむしろのとこなれもせず (五一)

⑦ 三月ふたつあるとしのはる、大将との、山ぶきのさかりなるをりて、右大臣との、中納言とのとまし、をりたてまつる  
かすみしくはるのかあることしより ちよまでにほへやへの山ぶき (五二)

⑧ おなじ人、さうぶにかきて

みのほどもおもひしらる、あやめぐさ 人のうきにはしたねながれて (六五)

⑨ 刑部卿、よと、もにれいならずとのみあるに、かれがたなる花どもをりておこせられたるに  
ことくさのきみがやまるのさかりにて 花はかれゆく秋のくれがた (一〇三)

⑩ あさがほの花にうつせみのつきたるを、人のがりやるとて

うつせみのこゝろとゞめぬよの中に あるかなきかのあさがほの花 (二〇四)

⑪ 花をりて人のゐせたるに、むしのはたらきもせで、やがてつきたるに

しらつゆのおきもあかさでくさまくら いかになにけるむしにかあるらん (二〇五)

56 在良朝臣集(書陵部藏) 在良 33

57 帥中納言俊忠集(書陵部藏) 俊忠 I 55

58 中納言俊忠卿集（書陵部蔵） 俊忠Ⅱ 65

① 同御時、女房の<sup>本</sup>花をうしうにぐして、つかはせりしに、相坂こえてたづねみし日  
けふこずはをとほのさくら如何にぞと 見ひとごとにとほまし物を<sup>本</sup>（三）

② 正月廿日比、雪ふりたりし朝に、二条家の<sup>本</sup>梅を折て、俊頼朝臣のもとにやりし  
さきそむる梅のたちえにふるゆきの かさなるかずをとへとこそおもへ（七）

59 六条修理大夫集（神宮文庫蔵） 顕季 375

① 十月十日ころになるまで、菊のさかざりしに、真尊阿闍梨のもとより、<sup>本</sup>おほきなる菊ををこせて、枝にゆひつたりし  
二葉より行すゑまでにさかへつ、これもやへさくしら菊の花（一二九）

60 前斎院撰津集（書陵部蔵） 撰津 54

① 十月ついたちころ、人のもとより、<sup>本</sup>もみちにかきて

たむけやまあらしにまがふもみちばや くれにし秋のかたみなるらむ（二八）

61 中宮上総集（彰考館文庫蔵） 中宮上総 11

① むつきの七日、中宮亮仲実がもとへ、<sup>本</sup>な、くさのな、つかはすとてよめる  
をがみ河むつきにはゆるゑこのうねを つみしなべてもそのみためぞ（二六）

② 人のもとへ、<sup>本</sup>わかなにそへてつかはしける

君がため夜ごしにつめるな、草の なつなのはなをみて忍びませ（三二）

③ 人のもとより、<sup>本</sup>わかなを、くりたりけるを見てよめる

いかばかりうれしからまし身につめる 年をわかなと思はましかば（三三）

④ 家綱がもとより、はまぐりを、こすとて、<sup>本</sup>やまぶきを上にさして書付けて侍ける 家綱  
やまぶきをかざしにさせばはまぐりを ゐでのわたりの物と見る哉（一六七）

⑤堀河院御時に、肥後がもとによきやまぶきありときこしめしてたりければ、まいらすとて、花にむすびつけたりけるこゝのへにやへ山ぶきをうつしては いでのかわづの心をぞくむ（一七二）

⑥桂の枝にかけて人のがりつかはしける

人しれずあふひを待としらせばや かつらのえだのおりもよからば（二二一）

⑦人のもとより橘を送とて

かぎりなく思ふ心をしらすは 花たち花のほひなりけり（二二三）

⑧五月五日、男、女のもとに、ながきねおこせたりければ、女にかはりてよめる  
袂にはかりにもかけじ人心 見ぬまにひけるあやめとおもへば（二九三）

⑨梅花にむすびつけて、人のがりつかはしける

匂ふかに思ひよそへて梅の花 おるにつけてもぬるゝ袖かな（一一六三）

⑩同ころ、あさがほにつけて人のもとにつかはしける

ほどもなきあさがほにをく露の身の なにうきことを思ひしるらん（一二三九）

⑪人に忘られてなげきける人のがり、きくにつけてつかはしける

きくのみとなに思ひけん秋くれば 人もうつろふ物にぞありける（一二八五）

⑫同人のもとより、松たけにそへてをくりてはべりける

ながらへむ君がゝきはのはるけさに ちよまつたけをそへざらめやも（一四〇五）

⑬中宮亮仲実がもとに、うしかりにつかはしけるついでに、はぎのえだにつけてつかはしける

うらむともしらでやしかのしきりには はぎのはひえをしからみにくる（一五二二）

63 田上集（島原松平文庫蔵）俊頼Ⅱ 82

64 二条大皇太后宮大式集（書陵部蔵）二条太皇太后宮大式 197

①四月ついたちころ、さかりなるさくらを人のをこせたる、かめにさしておまへにをきたるに、三四日しらず、源中納言のがり



つかはし、

くものうへにちとせとちぎる君がよは はなもときはのさくらなりけり (三四)

② 七月七日、まゆみのはにかきつけて

たなばたにあづさのまゆみかずことは いるがごとくにきみきませとぞ (五三)

65 行尊大僧正集(書陵部藏) 行尊 I 217

① なきまに、むめを、りてかへりにけるその人に

あひみぬになぐさむとしもなけれども 如本 ことはなより (二字分) なつかしきかな (一五四)

② おいたる人のもとに、やへ梅をやりたれば

おりしらぬ我が身なれどもむめのはな またかばかりのにはひをばみず (一五五)

③ 宇治まで、はなみにまかりたりしつとめて、人のもとより花おりておこせて

かすみわけよもの山べもたづね、ど やどのはなをもみつべかりけり (一五九)

④ 人のもとより、むめのはなを、こせて

みするともそでぞぬれける梅の花 むかしのはるのにはひならねば (一六三)

⑤ 宮の御めのとこのおさなきがもとより、むめのはなをほとけにたてまつれとて、をこせたるに

おこせたるやどののにはひをあはれなる ちりにしはなのゆかりと思へば (一七〇)

⑥ かへしをばせて、花をこそえさせたりしか 人になをえさせたれば

いかでかはかぜのつてにもむめのはな 我やどながらをりてみましな (一七四)

⑦ なでしこを、てらにおこせて、これをうゑてなん、よろづなぐさむといひたるに

なぐさむるとこなつだにもなきやどに よもぎがもとをおもひやらならん (一九一)

⑧ 宮の御めのとのもとより、あふひをおこせて

そのかみにおもはざりきなあふひぐさ きみゆへよそにかけてみんとは (一九二)

## 66 行尊大僧正集（書陵部藏） 行尊Ⅱ 135

① 三月つごもりに、ひるねしたるゆめに、あながちにこふる京の人々、あなり、はなにのみおもひなぐさめて、かくませとて、さ  
 くらの花一えだをりて

このはなのちりなんのちはいかゞせん 君によそふる物しなければ（八五）

## 67 為忠集（神宮文庫藏） 為忠 269

① 三月三日、あるやんごとなき女房の、桃の花を一えた<sup>（朱）</sup>○べきとなんいひおこせければ、かくよみて付侍ける  
 三千とせのよはひをのぶといふ桃の花をば君におしけくもなし（二三）

② 雨にしとゝあひたるさくらの花を、桜寮公よりおくれ侍とてよめる

けふしもぞ雨ふりそめて桜花 くれなるふかく色やみすらん（二四）

③ 醍醐にすめる僧の、わらびを籠につゝみておくとて、かくよみ添ておこせたりける

年つみて老をしらするさわらびの <sup>（マ）</sup>すゑをかゝみよ人もわが身も（二九）

④ 花山にすめるひじりのもとより、をみなへしのいとにほやかなるを一もととおこせるとて、かくよみて付ける

女郎花きみやしのおと一もとを をくるこゝろをあだにながめそ（一〇九）

⑤ 菊の花を一もと、ある僧のおこせるとて

千世のふる菊のよはひを君にぞと をくるこゝろに花はありける（一四七）

⑥ 紅梅をある人の 一えだおこせけるを、その返しに

くれなるにうはぞめしたる梅花 雨ふりそむる色とこそみれ（二二三）

## 68 基俊集（書陵部藏） 基俊Ⅰ 218

① 七日、わかな人のもとにつかはすとて

年をへてわかなはつめどおいにけり かしらに春の雪つもりつ、（四）

② としごろもの申わたりけれど、いとこゝろからくてやみ侍ける女の、いかゞ思けん、いとおもしろくさきたる花をつかはした

りしかば、いひつかはしける

いかにして花のした紐とけにけん 人の心はありしながらに（六）

③しるを人のもとにつかはすとて

おちつもるくちばがしたをかきかへし たがためひろふこのみとかしる（九六）

④十月ついたちころ、おほはらよりまだみぢぬかへでをしきて、くだ物いれておこせたりし人のもとにいひつかはしける  
おりけるはいかなる山の山人ぞ もみぢもあへぬあたしきのはを（一一三）

⑤三月十日ばかり、六波羅にかうおこなふと聞て、女車にのりまじりてまうでたりしに、くちおしくはてにければ、経よむあまの  
もとにまかりてかへらんとするに、ひきいで物にとて 桜のいみじうさきたるをおりてえさせしかば  
家つとにさのみなおりそ桜花 やまの思はんこともやさしく（一二一）

69 基俊集（書陵部蔵） 基俊Ⅱ 52

70 基俊集（書陵部蔵） 基俊Ⅲ 29

71 雅兼卿集（書陵部蔵） 雅兼 83

72 行宗集（書陵部蔵） 行宗 369

①内大臣殿に、折櫃にとりをいれてむめのはなさしてまいらせたりしかば、  
うぐひすやぬぎすて、けむき、すさへ いつよりきるぞむめの花がさ（五五）

②長承元年十二月廿四日雪朝、当齋院の御だいばむところへまいらする、雪ふりか、りたるたけにつけて  
くれたけのゆきうちらはらひけさみれば よごとに君がちよぞこもれる（七二）

③侍従中納言、まぜくだものつかはすとて

おもふことなるてふこのみねがふこと みつのおりびつこれをまいらす（一一四）

④敦経権守のもとより、梅花のちりたるをすゞりのはこのふたにいれて  
これを見よ、はのあらしにさそはれて わかきのむめのちれるすがたを（一二七）

⑤同二年二月六日、敦経権守の梅のおろしえだ、ひと、せとりてうゑたるが、はじめてはなさきたるみせにつかはすとて  
うゑくるやどははるとむめの花 なにかにほひのうすくこからむ (一三二)

⑥琳賢がもとより、いがぐり、あけびなどつかはして

いがぐりは心よはくぞおちにける この山ひめのゑめるかをみて (一六五)

73 都芳門院安芸集 (書陵部蔵) 都芳門院安芸 64

74 刑部卿平忠盛朝臣集 (神宮文庫蔵) 忠盛 I 38

75 忠盛集 (谷山茂蔵) 忠盛 II 190

76 左京大夫顕輔卿集 (書陵部蔵) 顕輔 146

77 待賢院堀河集 (書陵部蔵) 待賢門院堀河 137

78 六条院宣旨集 (書陵部蔵) 六条院宣旨 115

79 なりみち集 (神宮文庫蔵) 成通 99

80 田多民治集 (書陵部蔵) 忠通 232

81 出観集 (高松宮蔵) 覚性法親王 850

①はるに也て南院にまいりたるに、むかしうへをき給へるむめのさかりにさきたりければ、花につけてたてまつりける 源俊重  
おもかげもたちそふらめや花の色に 君がまそでのにはひかとみよ (七七九)

82 桂大納言入道殿御集 (書陵部蔵) 光頼 22

83 清輔朝臣集 (書陵部蔵) 清輔 444

①きさらぎの比、三条の女御のもとへまうでたりけるに、雪ふれるあしたなりければ、たゞにはいかになど女房申ければ、軒ち

かき梅をおりて、さしいるとてよめる

梅花にほひも雪にうづもれば いかにわきてかけさはおらまし (二六)

②閏十月ありけるとし、松のもみぢたりけるを人に送とて

神無月時雨、月のかさなれば たへずや松も下もみぢする (二二三)

③宮原に侍ける女に、草の葉にかきてさし入ける

いかにせむにゐはひまさすこひ草の しらけぬほどにあふよしもがな (二八六)

④女のをうみて、うぶぎぬこひければ、松の枝にかけてやるとて

千代に又ちよやかさねむ松ばらに 巢だちはじむる鶴の毛衣 (三二三)

⑤みあれの日、ともだちのもとよりあふひを送て、いかにしそめたりけることにか、昔の契こそうれしけれといふ心をいへりければ

いにしへの契はしらずあふひ草 おもひかけ、るけふぞうれしき (四〇七)

⑥みあれの日、あがたへゆきける人に、あふひをつかはすとて

けふはよきたむけをくさを程へなば 後のあふひと神やおもはん (四三三)

84風情集(谷山茂蔵) 公重 633

①左京大夫顕広がり梅の花おりてつかはし、人の枝につけて

むめがえの花につけてもおもひいでよ とふことは、なき身なりとも (三)

85林葉和歌集(神宮文庫蔵) 俊恵 1006

86源三位頼政集(流門文庫蔵) 頼政 I 687

①ある宮ばらなる女房に申かたらひて、時々まかりかよひける程に、あしわけなる事やありけん、久しうまからざりしかば、二月のいつたちころ、梅の枝につけてつかはしける

きまさずはさてもちりなん梅がえの それゆへならでゆかんとおもへば (一七)

②よろこびして侍ける比、あひしたりたる女の悦つかはさざりしかば、これよりつばみたる枝に付ていひつかはしける  
またじとや梅をみつゝもとはざらん ひらくる物をわれが思ひは (一八)

③新院の御時、さと大裏におはします比、大りに候けるが、れうき殿の前の梅の花さかりに侍けるを、小とりねしておりにつか

はしける枝に付て奉ける

九重のうちに匂へる梅の花 とへばちらさじとおもひしものを (二二)

④ 二月廿日比に大内の花見せよと申ほどに、いまだひらけぬ花につけてつかはしける

思ひやれ君がためにとまつ花の さきもはてぬにいそぐ心を (三二)

⑤ 二月つゐたち比に、花まだしきほどに、ならより作たる桜を、まぜくだ物の上にかざしてつかはしたるを、ひとりみんな口おしさに、むかひなる所に桜の梢のみゆるがまださかぬ程に、あるじのものとへ此作花をつかはすとて

君が住やどの梢のさかぬまに めづらしかれとはなたてまつる (三八)

⑥ いまだ殿上ゆるされぬ事をなげき侍しに、二条院の御時、弥生の十日比に行幸なりて、南殿の桜盛なるを一枝折せて、こそこの今年といかゝあると被仰下侍しかば、枝に付てまいらせける

よそにのみ思ふ雲井の花なれば 面かけならでみえばこそあらめ (八〇)

⑦ 弥生の十日あまりの程に、内女房さと大りより大内の南殿の花見に、上達部殿上人などひきぐしてまいりて、出ざまにちりたる花をかきあつめてつかはすとて

花ゆへに風ないとひそちればこそ ちる花とてもいへづとにすな (八七)

⑧ 是かれあまた申と聞て、女のもとに女郎花につけてつかはしける

おなじくは我にをなびけ女郎花 吹秋風はこゝろさだめじ (四六〇)

⑨ 久しくをとせぬおとこの許へ、うらみつかはしたりけれども、なをまてと来ざりければ、申つかはしける女にかはりて、すきにつけて

まねけどもこぬ夕されば花薄 なびきそめけん事ぞくやしき (四六一)

⑩ たえて久しく成にける女の許より、五月五日にあやめに付て遣したりし  
よそにのみ人は軒ばのあやめ草 うきねはたえずかゝる袖かな (四六四)

⑪ たえて久しく成たる女のもとより、思出て五月五日に、ながきねをつかはすとて

あはぬまにおふるあやめのねをみつ、たえぬ泪のふかさをはしれ（四六六）

⑫ おさなくて見たる女、おとなしくなりて後あひかたらひて侍けるに、女郎花に付てつかはしける  
女郎花そのかたおもひはめもたえて 花のさかりぞなづさはれぬる（四九二）

⑬ 久しくをとづれ侍ぬ女に、十月朔日ころに、いまだひらけぬきくに付てつかはしける  
君をわれあきこそはてね色かはる 菊をみよかしひらけだにせず（四九八）

⑭ さてほどへて、うつろひたる菊につけて、かれよりつかはしける

ひらけぬを秋はずとやみし菊の たのむかたなくうつろひにけり（五〇〇）

⑮ 同人のもとより、からの桜のさまをうつしたるなり、こゝに見あはせよとて、つくりたる桜の花をつかはしたりしかば  
もろこしの花もこゝにはわたりける ましてまちかき人はいかゞは（五二六）

⑯ 藤壺の藤をみせにつかはして

あふことをまつよりもげに今朝はなほ 心にしげくかゝりそめける（五三四）

⑰ 同人の許より、五月五日、あやめ草にあらぬ草に付てつかはしける  
けふとてもとはぬあやめのうきなかに あらぬすぢこそうれしかりけれ（五六六）

⑱ 又はじめてあひたる女に、正月朔日、子日松をつかはすとて  
今日よりは君と子日の松をとて おもふためしに人もひくらめ（六〇九）

⑲ 歳老たる人の、五月十日比に、花橘のありけるを、隣なる人のもとへ遣はすとて、おりひつのたてかみにかき付て遣しける  
たちばなは花のさくまでありけるに 老ぬる身こそとまるまじけれ（六二三）

⑳ 鳥羽院にさぶらひしとき、光信が許より桜の花をつかはして

みなもとはおなじ梢の花なれば にほふあたりのなつかしき哉（六八一）

87 頼政集（三井寺切） 頼政Ⅱ 29

① えだにむすびつけてまいらせ侍ける

よそにのみおもふくもみの花なれば おもかげならでみえはこそあらめ (五)

88 太宰大貳重家集 (尊経閣文庫蔵) 重家 617

① 正月七日子日にあたりたるに、人々摂政殿の御前に候て、これかれものがたりなどするに、御まへの御簾の中より、むすびたる文をなげだされたり、左大弁とりて見らるゝに、小まつとわかななどをつゝみてうたをかきたり、人々おほくおはすればとおもふを、とくく返しせよ、只今に又たれかはとありしかば 本歌

としをつむわかなのみかはけふは君 子日のまつのちよもそふらん (二九九)

89 前参議教長卿集 (丹鶴叢書) 教長 979

① あひしれる人の許より、八重桜を、りてつかはしける返ことに

やへざくらをれる匂ひにかさねても 猶この本ぞゆかしかりける (一三〇)

② 人のもとにさけりけるはぎを、人のほかにつかはしたりける、あるじにかはりてよめる

みま草にかるも昔はをしみけり 今のねごしのなさけなきかな (三四三)

③ うりは七月におくらんと申けるひとのもとへ、おどろかしつかはしける

うりをきみたなばた時と聞しより 彦星とのみ我ぞ成ぬる (五一七)

④ 人のもとよりたかむなをこひにおこせたる、つかはすとて よみ人しらず

たかうなをもとめえしこそ古へも ふた心なきためしなりけれ (九六三)

90 覚綱集 (書陵部蔵) 覚綱

91 有房中将集 (書陵部蔵) 有房 I

92 有房中将集・有房集 (書陵部蔵) 有房 II 479

93 禅林癖葉集 (書陵部蔵) 資隆 100

① ならなるひとのもとより、やへざくらをつかはしたりければ

わがためにおりけるならのやへざくら たのむこゝろをかさねてぞ見る (一四)



94 登蓮集（徳川美術館蔵）登蓮 26

95 皇太后宮大進集（彰考館文庫蔵）皇太后宮大進 32

96 前大納言実国集（神宮文庫蔵）実国 98

97 皇太后宮亮経正朝臣集（書陵部蔵）経正 119

98 忠度百首（書陵部蔵）忠度 103

99 経盛卿家集（神作光一蔵）129

① 三月晦日ころに、やへざくらにつけて皇后宮の兵衛内侍がもとへつかはしける  
はるふかみちらぬことだにあるものを やへまでにほふはなさくらかな（二三）

② 女御家宰相にもの申し侍しころ、ならにまかりてやへざくらのえだに付てつかはしたりし  
これを見よふるきみやこのやえざくら 心ながくもにはふはるかな（二五）

③ ひさひくおとせぬ女のもとより賀茂のまつりの日、あふひに付て遣侍ける

わすれにしその神やまのあふひ草 今日だにかけておもひいずや（九四）

④ 同社にいのりせさせ侍し僧のもとより、まつに巻数をつけてつかはして侍しかば、よめる  
ちとせまでさかへんことのためしとや よにすみよしのまつをみすらん（一〇三）

100 刑部卿頼輔集（書陵部蔵）頼輔 131

① かものまさひらが、人のもとへあふひつかはしたるをみて、そのつかひにつけて遣りける  
なをざりのことのはにだにあふひくさ かけてとはれぬみをぞうらむる（一〇二）

101 惟宗広言集（書陵部蔵）広言 100

102 入道大納言資賢集（書陵部蔵）資賢 29

103 祝部成仲集（穂久邇文庫蔵）成仲 100

104 栗田口别当入道集（書陵部蔵）惟方 249

①七日、子日にあたりたりしに歳、兵衛とのへ、わかなに松をぐして、御所の辺とりいでさせ給へと申て  
 きみがよを野辺のわかなにひきそふる　ちよのはつねのけふの松みよ（五）

②新院、くらゐおりさせたまひてのち、八条院、姫宮と申まいらせしとき、さくらはなをかめにさして、宮の御かたへまいら  
 せさせたまひたりしを、いかゞ申べきなどありしかば、かくぞおぼえ候と申

こゝのへの雲井にみえしさくらばな　おりてはまさるにほひなりけり（一九）

③顕昭法師、ひさしうをとづれざりしかば、秋ごろ、はぎのえだにさしてつかはしたりし  
 秋くればはぎもふるえにさくものを　人こそかはれもとのこゝろは（七三）